

地方史研究協議会
2026 年度 第 76 回（飯能）大会
報告要旨集

共 通 論 題

「山の根」の地域史
—西武蔵の山・町・里—

期日：2026 年 10 月 17 日（土）～19 日（月）

会場：飯能市市民会館大ホール

【自由論題研究発表】

1. 埼玉県飯能市加能里遺跡の研究 宮内 慶介（埼玉）……1
—関東地方西部の縄文時代後・晩期長期継続型集落の構成—
2. 寛永期における荒川流域の基盤形成 出野 雄也（埼玉）……2
—伊奈忠治の動向を中心に—

【共通論題研究発表】

1. 飯能周辺の山地・丘陵・台地 小田部家秀（埼玉）……3
—歴史の舞台としての地形・地質—
2. 発掘調査からみた古代高麗郡 大熊 雅弘（埼玉）……4
—集落の様相を中心に—
3. 中世丘陵の武士団 北爪 寛之（東京）……5
4. 近世後期西川林業地帯の流通組織の展開過程 丸山 美季（東京）……6
—文化 9 年浅草御蔵根太木上納一件を手がかりに—
5. 武州世直し一揆に見る山と町 金澤花陽乃（東京）……7
—上名栗村の動向を中心に—
6. 高山不動の信仰圏と交流について 村上 達哉（埼玉）……8
—主に近世において—
7. 西武蔵における鉄道網の発達と沿線遊覧地 平田 光洋（埼玉）……9
—武蔵野鉄道・旧西武鉄道沿線を中心として—
8. 西武蔵における土地の軍事利用とその後の展開 梅津あづさ（埼玉）……10
—入間市域の事例を中心に—

埼玉県飯能市加能里遺跡の研究
－関東地方西部の縄文時代後・晩期長期継続型集落－

宮内 慶介（埼玉）

関東地方では縄文時代後・晩期に遺跡数が減少することはよく知られている。しかしそうした中においても遺跡が群集する地域やそうでない地域があり、多様な地域性が存在する。今回取り上げる飯能市加能里遺跡は、関東地方西部においては数少ない縄文時代晩期まで継続する集落遺跡である。加えて遺跡が所在する入間台地は、縄文晩期の遺跡分布密度が極めて低い地域であり、関東地方の縄文後・晩期の地域性を考える際のモデルのひとつを提示しうる地域といえる。

また、加能里遺跡が位置する飯能市大字岩沢は、入間川が形成した段丘崖から無数の湧水が流れ出る水資源に恵まれた地域である。周辺遺跡を含めて、湧水地点を中心に縄文時代草創期から晩期にわたる遺構・遺物が確認されており、縄文時代の集落の動態を探るうえでも興味深い地域となっている。

今回の発表では、縄文時代後期から晩期にかけて、千年以上ともいわれる長期にわたって継続した集落の変遷を加能里遺跡の調査成果をもとに確認し、遺跡数の少なさゆえに衰退という述語で説明されることの多い当該期の実態を考えることにする。

結論から言えば、居住痕跡の累積性・反復性から定着性の高い安定した定住生活が営まれていたと考えられ、数の減少＝衰退とすることはできないことがわかる。また、集落周辺の活動域に残された道もしくは足場としての機能が推定される礫敷遺構の存在などは、周辺環境を計画的に整備・管理していたことを示唆するものとして注目される。

しかしながら長期に継続した加能里遺跡の集落も晩期中葉には姿を消す。入間台地西部ではつづく弥生時代、古墳時代には一部の短期的な遺跡以外人類の活動痕跡はほとんど見られなくなる。この空閑地にのちに古代高麗郡が建郡されることになるため、縄文時代後半期の安定した定住生活の基盤が何であり、なぜそれがつづかなかったのかを解明することは周辺の地域史を考えるうえでも重要な問いとなる。今回は、狩猟・採集を経済基盤としながらも長期に継続する定住生活を確認していた縄文社会の実態を加能里遺跡の近年の調査成果から概観し、地域における自然環境と人類活動の関わりといった地域史の根幹部分を考えるうえでの基礎としたい。

寛永期における荒川流域の基盤形成 —伊奈忠治の動向を中心に—

出野 雄也（埼玉）

本報告は、近世前期に進展した関東の大規模開発の実態を検討することで、江戸幕府の支配体制の基盤が機能的に形成された様相を開発の視点から呈示する。具体的には、寛永期に実施された荒川の瀬替えを基軸とし、開発主導者である幕府代官伊奈忠治の動向に注目しながら武蔵国の荒川流域で展開した諸所の開発事例を取り上げ、流域開発の視点から俯瞰的に考察を試みる。

代官頭伊奈忠次を父にもつ伊奈忠治は、代官頭の地方支配に関する権能を継承し、いわゆる「利根川東遷」や「荒川西遷」、玉川上水の開削等に携わった。しかし、近世土木史上、特筆すべき開発は、利根川東遷に関する先行研究の蓄積がある一方、荒川西遷等に関しては地理的な考察からその意義が示されるものの、実証的な検討はいまだ不十分な水準にある。

寛永6年（1629）に実施された荒川の瀬替えは、荒川堤防と中山道の整備を伴い、前年には鴻巣と大宮の中山道の付け替えが行われ、大宮では新たな宿場町の造成が行われた。各地の開発はこの時期に完成をみた大宮台地南部の赤山陣屋を拠点として展開し、中山道方面と日光御成道付近の赤山陣屋、そして日光道中方面を東西に結ぶ赤山街道も整備された。瀬替えの年に造成された見沼溜井の堰堤上がこの街道の道筋にあたり、さらに溜井を用水源にした下流域の新田開発が進展したことで、大宮台地以南の中山道・日光御成道・日光道中の各宿駅を維持する生産力が向上し、街道や宿場町の整備も進む。また大宮台地東側の元荒川流域は、同じ中川低地に属する綾瀬川流域とともに治水環境が改善する。草加宿あたりでは瀬替えを前後して治水工事が施工され、綾瀬川と荒川の合流部近くには新水路に沿って伊奈氏の小管屋敷が造営された。そして江戸と直接連絡された荒川水系の上流域では、瀬替えにより水量が増加し、山間部の薪炭や秩父材、外秩父の西川材を江戸に供給する舟運が活発化する契機となる。一方で大宮台地西側の荒川低地では増加した河川水量に配慮した下流域の築堤が行われ、瀬替えと時を同じくして河口部の深川が開発された。

寛永期の荒川の瀬替えは、時代的にはその前後の河川や街道、新田等の開発行為を含み、空間的には源流域から河口部までを視野に入れた立体的な荒川流域の総合開発であったと理解できよう。伊奈忠治による各開発地の関連性に濃淡はあるにせよ、当該期の荒川流域で展開した開発行為を包括する概念として「荒川の西遷」（荒川西遷）を評価したい。

飯能周辺の山地・丘陵・台地
—歴史の舞台としての地形・地質—

小田部 家秀（埼玉）

本報告は、西武蔵の「山の根」地域について、地形・地質の成り立ちを通観し、そこに展開した中世の産物として茶・板碑・鉄を取り上げ、「山・町・里」の連関を考察する。

関東山地を構成する付加体は、様々な成分の岩石が混在するため、風化すると植物の生育に最適な土壌となる。茶の生育にも適し、付加体山地は古くから銘茶の産地となった。中世に京都で編纂された往来物に、武蔵国の茶産地として「河越」が挙げられている。河越は、入間川と東山道武蔵路の結節点に当たる水陸物流の要衝で、周辺地域で生産される茶の集散地だったと考えられる。ところが、河越茶の生産流通拠点と考えられる無量寿寺（中院）で編纂された書物では、武蔵国の銘茶を「慈光茶」と記し、付加体山地にある慈光寺で生産される茶を銘茶とする。西武蔵の山の根地域では、茶や木材など、山・里（生産地）の産物が、町（集散地）に集まり、都市（消費地）へ流通する。「慈光茶」も、「河越」から流通すれば、消費地（都市）では「河越茶」に包括されていたのだろう。

板碑の石材である青石（緑泥石片岩）は、山地の石材供給地で外形形成され、河川沿いに下流域へ供給され、消費地で種子や銘文が刻まれる。初発期の入間川流域に分布する大型板碑は、塔形式・種子形式を同系とするものが多く、これらの板碑の造立に河越の無量寿寺が関係している可能性が指摘されている。また、板碑の採石・製作には慈光寺の影響が想定されている。茶と同様に、山地の寺と平野の寺のネットワークが、中世「山の根」地域の物流や文化を形成していたと考えられる。

「山の根」地域の丘陵・台地は、関東山地と関東平野が出来始めた頃に堆積した上総層群を基盤とし、その上に扇状地性の段丘礫層が堆積し、風成層である関東ローム層が覆う。ローム層を母材とする黒ボク土は、ススキなどの草を燃やした炭の粉を大量に含み、原始の時代から野焼きによって草原の環境が維持されてきたと考えられている。さらに、関東ローム層と段丘礫層は水はけが良いため、水田稲作に不向きで、井戸を掘るのも困難な乏水地帯となり、武蔵野台地は長く人が住めない空閑地となっていた。しかし、広大なススキ草原は馬の飼育や狩りに格好の場となり、武蔵武士成立の素地となった。

加治丘陵を構成する上総層群には火山灰起源の鉄鉱物が多く含まれ、古代窯業の発展で丘陵から流出した砂鉄が川の流れて水簸され、入間川に濃集したと考えられる。中世に丹党加治氏が本貫地とした入間川左岸一帯は、柏原鍛冶・鋳物師の活動域と重なる。丹党は、鉱山や冶金といった職能によって結びついた武士団とされ、加治氏は山（木炭）・里（砂鉄・鍛冶）・町（集散地）を一体的に支配することで、水田稲作に不向きな土地にもかかわらず、鉄生産により鎌倉幕府内での地位を高めていったと推測される。

発掘調査からみた古代高麗郡 —集落の様相を中心に—

大熊 雅弘（埼玉）

高麗郡は武蔵国に置かれた 22 の郡のひとつで、現在の飯能市、日高市に位置する。高麗郡という名の通り、「高麗」（高句麗）とは深い関係があり、続日本紀には霊亀 2 年(716)、東国 7 か国に住む高麗人 1,799 人を遷し高麗郡を建郡したと記され、今も高麗神社、高麗川など高麗の名はこの地域に残されている。

高麗郡は秩父山地と関東平野(入間台地)のちょうど変換点、「山の根」に位置する。高麗丘陵を中心に北は高麗川、南は入間川に挟まれた範囲を領域とする。高麗川、入間川ともに高麗郡付近の中・上流域は台地を深く浸食しているため崖を形成する。台地面と両河川の比高差は大きく、水田耕作が可能な低地は形成されていないため、高麗丘陵や秩父山地から流れる小河川沿いに谷津田が作られる、という地理的環境にある。

これまでの発掘調査の成果によって、縄文時代のこの地域には多数の遺跡が形成されたことが確認された。しかし弥生、古墳時代には遺跡がほとんど確認できなくなってしまい、高麗郡域はこの時代、広大な「空閑地」となっていた。8 世紀初頭になるとこの「空閑地」に集落が出現し、その後急激に集落数が増加する。8 世紀初頭は続日本紀に記された高麗郡建郡の時期であり、史料に記された記録と発掘調査の成果が合致する。

先述のように高麗郡域は水の利用が難しい。そのため高麗郡の建郡は水田開発による米の増収を意図したものではなく、手工業生産、特に入間川右岸に位置する加治丘陵に広がる東金子窯跡の開発と連動したものとする意見がある。東金子窯跡は 8 世紀前半に開窯、8 世紀後半に急速に拡大するという一連の動きが高麗郡集落の動向と重なるため、窯業生産と高麗郡の関連は大いに認められると考える。

筆者は発掘調査を行なう中で、紡織や漆製品の生産に関わる資料が高麗郡内から出土していることに注目していた。高麗郡研究の中で窯業以外にもそのような手工業生産について想定されていたが、実際に検討されてはいないため、今回取り扱うこととした。

高麗郡内からは紡織に使う紡錘車(ぼうすいしゃ)^{ぼうすいしゃ}紡錘車は 8 世紀の前半に出現し、8 世紀後半以降増加していく傾向が見られた。また広く散在するのではなく、高麗郡家が推定される王神遺跡や官衙機能を有すると考えられる張摩久保遺跡に集中することも確認できた。同様に漆関連資料についても 8 世紀初頭には見られず、王神遺跡に集中する様子が認められた。

紡錘車や漆付着土器は素材の加工や製品の生産に使われる道具である。拠点となる遺跡にこれらの資料が集中することは、素材を拠点に集積し、集中的に加工、生産を行ったと考えられる。河川や陸路を使い、素材を搬入し、生産した製品を搬出した様子がうかがえる。このような体制が整うのは高麗郡内の集落の生活基盤が安定した 8 世紀前半ごろである。

強引ではあるが山(丘陵)：素材の生産→里(郷)：生産・加工→町：入間郡家や国府といった物、人の動きが見えてくる。

中世丘陵の武士団

北爪 寛之（東京）

西武蔵山の根地域の武士団は、高麗丘陵に加治氏、加治丘陵に金子氏、狭山丘陵に宮寺氏・山口氏など、丘陵縁辺部に居館を構え、御家人に編成された。しかし、伝存する古文書は決して多いとはいえず、古文書のみではこれらの武士の姿を俯瞰することは難しい。

そこで、本報告では山の根地域に多く見られる、所謂「初発期板碑」に注目し、その分布・特徴を明らかにした上で、主に中世前期（特に鎌倉中・後期）の武士団の拠点、周辺環境を復元し、概観したい。

「初発期板碑」は千々和實氏によって注目され、主に旧荒川・入間川水系に広く分布していることが知られる。概して大型で、厚さは厚く、板碑の種子の形態に地域差や時期差が見られ、その違いから種字類型を分析した研究も見られる。これらの板碑は在地領主層によって造立されていることがすでに明らかにされている。本報告においては若干定義を変更し、「初期大型板碑」として、当地域の種字が判明する初期の板碑を網羅的に収集し、鎌倉中・後期の山の根地域の武士団を俯瞰することを目的とした。

山の根地域の板碑を、磯野治司氏の種字類型の分類を用いた研究を援用して、高正寺類の板碑、加治氏系統の板碑、その他の板碑に分類した。高正寺類の板碑とは、入間市高正寺にある寛元4年（1246）銘板碑の種字類型を基準とした板碑で、現在の飯能市から東京都板橋区に至るまで流域に広く同類型の板碑が残されている。これだけ広範に分布していることから、無量寿寺（現川越市の中院）や泉福寺（現桶川市）などの天台浄土系寺院の存在が指摘されている。一方の加治氏系統の板碑は、入間市の円照寺や飯能市の智観寺など、加治氏の館周辺に造立されることが多く、真言念仏系の影響が見られることから、同じ地域でも異なった類型の板碑を造立する武士団が併存していたことが指摘できる。更に山の根地域の初期大型板碑は高正寺類の板碑の数が多いことから、当地域では高正寺類の板碑をかなり積極的に受容してきたことが分かった。

続いて、初期大型板碑を山の根の武士団の氏族毎に落とし込んでみると、館や菩提寺の周辺など本拠周辺に板碑が所在することが多く、館と距離を置く場所にある場合も、有力な拠点として機能していた可能性が指摘できる。特に金子氏は加治丘陵を挟んで丘陵南麓に家忠を祖とする十郎系、丘陵北麓に親範を祖とする余一系に分かれるが、初期大型板碑の所在は峠越えをする地に建てられているなど、丘陵の拠点となる場所を金子氏が支配していることが分かった。板碑の移動の問題に注意を払いつつ、板碑の所在と氏族にとっての拠点の意味・役割を明らかにすることができる。このように初期大型板碑の分析は、その所在が武士団の本拠と密接に関わる、地域性の指標となりうる資料であり、個々に板碑を分析することで、各氏族の本拠の様相を知る格好の材料となるといえよう。

近世後期西川林業地帯の流通組織の展開過程 —文化9年浅草御蔵根太木上納一件を手がかりに—

丸山 美季（東京）

本報告では、西川林業地帯における材木生産（伐出・製材・運材）・流通（販売）の担い手である山元材木商人と、その一部が組織した筏仲間に着目し、文化期（1804～1818）における西川材の流通構造の変化と、その担い手が地域社会に果たした役割を検討する。本大会の共通論題「山の根の地域史—西武蔵の山・町・里—」を踏まえ、山地で生産された材木が川筋や町場を介して江戸へ運ばれる仕組みと、その変化を追う。その具体的な事例として、文化9年（1812）の「浅草御蔵根太木上納一件」を中心に取り上げ、材木流通によって結ばれた山・町・里と江戸との地域的な関係を考察する。

西川林業地帯では、山方で伐出された材木が筏に組まれ、飯能で筏の組み換えを行ったうえで、入間川・高麗川・荒川などの川筋を下り、千住の筏宿から江戸へと運ばれていった。こうした材木の生産・流通は、山間部の生産者だけで完結するものではなく、山元材木商人、筏を組み川下げを担う人々、町場、江戸の材木市場など、さまざまな主体の関係によって成り立っていた。

とりわけ文化期は、山元材木商人の活動が活発化するとともに、筏仲間が成立し、材木の川下げ・販売に関する組織化が進んだ重要な画期である。文化9年（1812）の「浅草御蔵根太木上納一件」では、山元材木商人の一部によって組織された筏仲間が、浅草御蔵の根太木を安価で上納する代わりに、川触れの発給を求める願書を幕府に提出している。この事例からは、筏仲間が単なる運材集団ではなく、幕府との関係を構築し、その権威を背景に川下げを有利に進めようとする交渉主体として活動していたことが窺える。すなわち、川筋で問題が発生してから訴訟によって解決するのではなく、あらかじめ幕府に冥加として根太木を安価で納めることで、川下げをめぐる障害や争論を未然に防ごうとした点に、この一件の特徴がある。

もっとも、この幕府への働きかけによって、筏川下げの際に御用幟や御用提灯を使用できるようになるなど、一定の効果がみられたものの、川筋の問題が直ちに解消されたわけではなく、その効果には限界があった。しかし、この一件は、山元材木商人や筏仲間が自らの流通上の問題を幕府に提示し、その解決を求める主体として活動していたことを示している。以上から、文化期における流通組織の展開が西川材の流通構造をどのように変化させ、材木流通を介した山・町・里と江戸との結びつきにどのような意味をもったのかを明らかにする。

武州世直し一揆に見る山と町 ー上名栗村の動向を中心にー

金澤 花陽乃（東京）

武州世直し一揆は、慶応2（1866）年6月13日から19日にかけて発生した、近世最大級ともいわれる世直し一揆である。発生から鎮圧までわずか一週間という短期間ながら、瞬く間に武蔵国一帯及び上野国にまで拡大し、最終的に関係村は200余、参加者は数万から十数万人ともいわれ、打毀された豪農商は500軒以上に及んだ。その発端となったのが武蔵国秩父郡上名栗村と飯能町であり、本一揆は山と町の関係性に端を発したものであることができる。本報告は、この原初の段階に注目し、主に上名栗村の動向から村内、山方同士、そして山と町それぞれの意識や諸関係を見直し、本大会テーマでもある「西武蔵の山・町・里」の地域像の特徴の一端を描き出すことを試みるものである。

まず上名栗村小前層の動向からは、蜂起時と帰村時で彼らの意識に変化があったことと、村内物持層への打ち毀しの意図について従来の評価とは異なる意識を持っていた可能性が見て取れた。また、小前層と相対した上名栗村物持層については、互いの動向を量りながら自らの出金額を抑えようとする動きと、小前層よりもむしろ新組村役人が古組村役人である新立町田家の存在を重視していた様子が明らかになった。そして上名栗村での施金交渉においては、物持層と小前層の間に位置して両者を繋ぐ、調整役とも言える人物が存在した。

続いて近隣村の村役人の言動から、入間川上流に位置する「上筋村々」として同一視されがちな山方の村同士の関係を改めて見てみた。そこには、物持層が複数存在する突出した村として、若干の対立感情とともに上名栗村を見る近隣村の姿があった。その背景には、互いの経営規模の認識を前提として、重複する雇用関係や筏仲間に限らない重層的な仲間の構造などがあった。しかし、このような対立の要素をはらみながらも、上名栗及び近隣の村々は一揆を「天災」として水に流すなど関係の維持に努めていた。

最後に、飯能町と上名栗村を中心とする山方村々との関係性についても概観した。飯能の町と山方においては、どちらかが圧倒的に優位に立っていたわけではなく、いわば持ちつ持たれつの関係であった様子がうかがえた。また、一揆後は、生活の存続のために従来の日常の回復を目指す一方で、中々それが叶わなかった状況も垣間見えた。

しかし本報告では、上記のように山と町に関わる諸関係を断片的に見出すにとどまった。今後それぞれの関係性をどのように関連付け、深化させて1つの地域像として描いていくかが課題である。

高山不動の信仰圏と交流について ー主に近世においてー

村上 達哉(埼玉)

本報告は、飯能市域に所在する山岳寺院の一つである高山不動を例にとり、近世の「山の根」における山岳寺院に対する信仰の地域的拮がり(信仰圏)を検討し、山岳寺院と町・里との交流を明らかにしようとするものである。

検討に当たっては、常楽院寄託史料(飯能市立博物館蔵)である「高山惣記録」(明和 8<1771>年)・「武州高山奉加帳 全」(文政 2<1819>年)・「一山五流仕方帳」(文政 10<1827>年)・「一山行事」(弘化 5<1848>年)・「常楽院什物記録帳」(安政 6<1859>年)の 5 つの史料及び、19 世紀前半に編さんされた地誌『新編武蔵風土記稿』の記述を参考にした。

筆者は平成 20 年代前半に飯能市域の山岳寺院について小稿にまとめ、その後特別展を担当した。本報告ではそれらで示した内容を踏まえ、高山不動の信仰圏と交流に焦点を絞った。

高山不動と町・里との交流については、主体者を可能な限り明確にする必要がある。高山不動の組織は別当の常楽院(新義真言宗醍醐三宝院末)を筆頭に、社僧(宝性<勝>院 常楽院末)、祠堂(杉本坊・樋下坊・池端坊など 常楽院支配)、祝給(高蔵坊 常楽院門徒 他)などと(社僧・祠堂・祝給を「坊中」と呼ぶ)、御師によって構成される。それらを総じて「一山五流」などと呼び、高山不動「一山」を、「五流」が役割分担し協同で運営していた。ただし、別当及び坊中に対して御師は御朱印地の年貢金の使い方が原因で、ある意味緊張関係にあった。別当も当初から常楽院ではなかったようである。

交流のあり方は各史料から、ア 菩提檀家・祈願檀家と菩提寺・祈願寺としての関係、イ 不動堂屋根葺き替えへの対応、ウ 護符の配札と受領、エ 奉加の要請と対応、オ 参詣と対応が把握できた。カ 出開帳については、高山不動は実施していない可能性が高い。

把握した交流のあり方から高山不動の信仰圏を分類した。A 山岳寺院が所在する村(高山村)内、B 高山村周辺の地域、C B の地域より遠方にあり、護符の配札を受ける地域の 3 つである。高山不動の信仰圏では、信仰圏 B の地域の村・集落が高山不動を支えていた様相がうかがえたが、交流のあり方は一様ではない。中でも不動堂の屋根葺き替えに際し、茅・足代木・縄を差し出している村・集落との交流のあり方、特に越生・毛呂山方面の村々との関係性が注目された。信仰圏 C については範囲が不明だが、「武州高山奉加帳 全」が手掛かりとなることを指摘した。信仰圏 C の範囲がぼんやりとだけ見えてきたのは成果である。

西武蔵における鉄道網の発達と沿線遊覧地 ―武蔵野鉄道・旧西武鉄道沿線を中心として―

平田 光洋（埼玉）

本報告では、西武蔵を通過する鉄道のうち、主に現在の西武鉄道の前身である武蔵野鉄道、旧西武鉄道（前身の川越鉄道を含む）沿線の遊覧地について、明治期から昭和戦前期に発行された旅行記や鉄道会社の沿線案内より取り上げ、その開発経緯や各社が行った宣伝の内容等を概観し、その特徴について考察するものである。

明治末期や大正初期の旅行記や沿線案内を見ると、武蔵野鉄道や川越鉄道沿線に描かれているのは、「①鉄道建設以前から存在する、寺社仏閣・地形等の名所・風景を単体でアピールする遊覧地」が中心である。ただし、明治44年(1909)に完成した所沢陸軍飛行場は、所沢を代表する新たな遊覧地として認識されていたことがわかる。

次に、大正から昭和初期にかけて発行された、武蔵野鉄道・旧西武鉄道の沿線案内図において、西武蔵周辺における主要遊覧地を、(1)飯能町及び加治丘陵周辺、(2)狭山丘陵周辺、(3)飯能以西の3つに分けて概観してみる。

(1)では、天覧山周辺に代表されるような、「②遊覧客を地元呼び込むため、既存の景勝地や旧跡を中心として面的に整備した遊覧地」が目立つ。(2)では、村山・山口両貯水池という「③国等の大規模開発事業により新たに生まれた遊覧地」が展開している。(3)では、正丸峠などを中心に、「④鉄道会社自らが利用客増加を目的に兼業事業として整備したレジャー目的の遊覧地」の存在が際立つ。なお、(3)は主に武蔵野鉄道によって開発が進められたが、その開発に、同社による兼業事業の拡大と、戦時下という時代背景が反映されている点は、同社独自の要素を含んでいると言えよう。

武蔵野鉄道・旧西武鉄道沿線の遊覧地は、上記①～④に大別される。「西武蔵の山・町・里」に当てはめた場合、①は町・里、②、③は里のエリアに点在し、④は山のエリアが中心となる。武蔵野鉄道に関して言えば、沿線遊覧地は、路線延伸に伴って、里・町→山という流れで整備された。なお、③の遊覧地は、西武蔵の鉄道の沿線開発に、ある種の個性を加える特徴的な存在となっている。

西武蔵における土地の軍事的利用とその後の展開 —入間市域を中心に—

梅津 あづさ（埼玉）

首都近郊の西武蔵地域には、高度経済成長期以降に開発された大規模住宅団地・公共施設・学校・工場が多数立地するが、その多くは武蔵野台地を中心とした平坦地においてアジア太平洋戦争終結まで軍事目的に利用された土地の跡地である。本報告では、従来主対象とされてきた軍直轄施設に加え、軍需産業に関わる民間企業等にも対象を広げ、西武蔵地域の軍事関連施設と戦後の土地利用の変遷を概観するとともに、入間市域の「狭山陸軍飛行場」の事例から、軍事利用された土地が地域にもたらした影響と歴史的・今日的意義を検討する。

1911年に日本初の所沢飛行場が武蔵野台地上に開設され、1922年、立川飛行場開設、多摩地域への航空機産業を中心とした軍需工場の進出などにより、この地域は「軍都」「空都」と称されるようになっていく。軍都化の背景には、首都を30～60km圏で取り巻く飛行場配置、障害物のない平坦地を要したことによる台地への立地、首都防衛との関連などがあり、世界恐慌に伴う桑畑の用途転換も用地供給を促したものと考えられる。戦後は米軍接收地を除き極度の食糧難に対応するための農地開拓事業へ用地を提供し、政策の重点が戦後復興から産業振興、公用・公共用地へと推移するなかで軍事利用されてきた土地の跡地の用途もまた変遷していく。

入間市域には狭山陸軍飛行場（1934年）、陸軍航空士官学校（1938年）、豊岡陸軍飛行場（1940年）などの軍事施設が設置された。戦後、航空士官学校・豊岡陸軍飛行場一帯は米軍ジョンソン基地を経て航空自衛隊入間基地、公共施設等に転用されてきた。また、一部は「留保地」として長く未利用であったが、近年は自衛隊基地として再び軍事的目的に利用される動きもみられる。

狭山陸軍飛行場は1934年に開場、数度の拡張を経て敗戦時には約237haに達した。広大な跡地には戦後542戸が入植して開墾農地化、高度経済成長期には畜産先進地・大規模茶園や武蔵工業団地へ転換、近年も圏央道開通等により土地利用の転換が続く。狭山飛行場という軍事施設の跡地は、各時代の変化に対応しつつ内実を変えながら、市の産業と人々の生活を支え続ける場所として機能してきたことがわかる。

なお今後の課題として、埼玉県側の民間軍需工場（入間市域の「豊岡飛行機」等）の調査を進めるとともに、航空士官学校・豊岡飛行場の跡地利用について狭山市を含めた一体的な検討が必要である。